

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2023 年度
氏名	ワギー 聖馬	指導教員 (主査)	笹川 智子

論文題目	大学生の攻撃性と社会的自己制御が学校適応感に及ぼす影響
------	------------------------------------

本文概要

近年、大学生の不適応が増加している。青年期後期は精神疾患の好発期であり(西山・笹野, 2004), 20 歳未満の精神疾患患者の総数は増加傾向にある(厚生労働省, 2020)。現代青年の不適応の背景には、攻撃性の高さが一因にあると考えられる。高い攻撃性は、社交不安や孤独感、抑うつなどの精神症状と関連することが示されており (Storch & Baumeister, 2004 ; 楯本・山崎, 2008), 退学や学校不適応の予測因となると考えられている (松田, 2009 ; 森岡他, 2018)。一方、攻撃性が高い個人においても、自己を制御したり、必要に応じて自己主張を行ったりする、社会的自己制御能力(Social Self-Regulation: SSR)が高ければ、社会的な不適応が予防できると考えられる(原田他, 2008)。本研究では、攻撃性の表出と抑制の影響を理解するために、自己主張および自己抑制を測定できる広範な指標である SSR を媒介として、適応感への影響を検討することで、青年期の攻撃性と適応の関係性を検討することを目的とする。

首都圏の私立大学に通う学生 170 名を対象に、Google フォームを利用した無記名式のアンケート調査を実施し、青年適応感尺度 (大久保, 2005), 社会的自己制御尺度 (原田他, 2008), 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) への回答を求めた。相関分析の結果、主に攻撃性の高さが適応感と負の関連を示し、特に敵意の高さが適応感の低さと関連する要因となっている一方で、言語的攻撃の高さは SSR と強い正の相関関係にあることが示された。攻撃性と SSR の因子得点に基づきクラスタ分析を行い、4 グループ解を採択した。各グループについて、標準的な攻撃性を持ち SSR が高い高制御群 (41%), 高い攻撃性を持ち SSR が中程度の中制御群 (31%), 高い攻撃性を持ち SSR が低い低制御群 (9%), 低い攻撃性を持ち SSR が中程度の制御不要群 (19%) という特徴が示された。高制御群は言語的攻撃性が強くとも高い SSR を持ち、適応感が高くなることが示唆された。中制御群は怒りを喚起されやすく敵意を感じやすい傾向があるため、拒絶されている感覚を抱えていることが示唆された。低制御群は短気、敵意の高さに加え、自己主張、持続的対処・根気の得点が低く、短気で敵意を感じやすい傾向があるため、不適応を強く感じるということが示唆された。制御不要群は、中程度の SSR 持ち、攻撃性が低く行動化しにくいいため、適応感は標準的であることが示唆された。これらのことから、大学生における攻撃性の問題とは、低制御群に代表されるような、怒りを喚起されやすく敵意を感じやすい傾向と、十分な自己制御能力が無く、適切な言語的攻撃性の形として表出できないことからなる不適応感であると考えられた。また、このような特徴を持つ学生が、全体の 9%程度存在することが示された。

本研究では高い攻撃性を有していても、SSR が高いことで適応感が高まること、高い SSR を所持していれば、SSR が自己主張的側面と自己抑制的側面のどちらかに偏った状態であっても、適応感が高いことが示された。また自己主張的側面の影響が強く、相手にネガティブに捉えられる可能性を考慮しても、ある程度自己主張できることの方が、適応感を高めることが示された。本研究の結果から、不適応を起こす学生に対して、攻撃性の制御困難といった部分に焦点を当てることで、アセスメントを精緻化し、心理教育的な介入ができるようになると考えられる。今後は、文化差を考慮し、客観的な指標に基づいた攻撃性の測定を行うことや、攻撃性の制御により大きな困難を抱える調査対象者を増やすことで、こうした対象への支援方法を模索していくことが課題である。